The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』におけるトテとダッテ
Author(s)	髙谷, 由貴
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 264-250
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90801
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語文116・117（2022・3　大阪大学国語国文学会）

『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』におけるトテとダッテ

髙　谷　由　貴

1. はじめに

本稿は、発話・思考の引用や、極限のとりたてとして使用されるトテについて、近代語のコーパス資料の調査により、その使用の衰退の様相を、文体的特徴の観点から記述するものである。トテは中古以降、主として引用の際に広く用いられてきた語であるが、現代語においては会話で用いられる頻度が低いという指摘が見られ（森脇 1995）（友定 2003）、衰退傾向にある。しかしながら、明治・大正期の雑誌・小説の中には、トテの使用が確認される。本稿は、近代語におけるトテの具体的な衰退状況について、ダッテと比較しながら、文体、使用場面、そして人物描写の観点からも調査・考察する。

2. 先行研究

2.1. トテ/ダッテの意味

極端なものをとりたてて述べる際に、現代で全国的に使用されるのは「デモ」「モ」「マデ」であるとされ、「ダッテ」は東日本を中心に使用されるが（友定2003：261）、「トテ」は、話し言葉として使われにくい（森脇 1995：14、友定 2003：264-265）。使用される場合も「古語性」が強く、特殊な形式であるとされる。（森脇1995：14）。

このトテは中古語において、主に思考・発話の引用を表す形式だとされていた（小田：2015）。（１）a.のトテが受ける「これまゐらせ給へ」は、大進生昌の発話であり、「生昌が、これを差し上げてくださいと言って、御硯などを御簾の中に差し入れる」と解釈される。b.のトテは「女である私も試みてみようと思って」と解され、心内語を引用するものである。

（１）a.「これまゐらせたまへ」<u>とて</u>、御硯などさしいる。（枕草子）

b. 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。（土左日記）

一方、中古語には極限を表すトテもあることが指摘されており、（２）がその例である（辻本 2017c：６）。極限の意味合いとは、すなわち、日本語記述文法研究会（2009：87）による「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を暗示する」機能である。（２）は惟光の娘に興味を持った夕霧に対する、娘の兄弟の発話である。男兄弟という、娘の近くに寄せ付ける蓋然性の高い存在も寄せ付けない（したがって当然、君達にも寄せ付けない）といった解釈となろう。

（２）「いかでかさははべらん。心にまかせてもえ見はべらず。男兄弟とて近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覧ぜさせん」と聞こゆ。（源氏物語　少女）［父惟光は男兄弟だって娘の近くに寄せ付けないのに、まして、どうして貴公子にお引き合わせしようか］

一方、近世後期以降、ダッテという形式も極限のとりたての意で使用されるようになる（此島 1973）。このダッテは、現代語では、あらかじめ該当する候補から除外されている要素を、それに該当する候補として付け加える際に使用される（蓮沼：2003）。

（３）たのむから自立した生活をしてくれ！おれだってこれからは長期で家を空けることもあるんだぞ！（『のだめカンタービレ』10巻）

（３）は「これからは長期で家を空けることもある」に該当する候補として「おれ」が排除されている文脈において、その候補として含まれるべきであると主張している。このような現代語のダッテは、断定の助動詞ダと、トテから変化したという（此島1973、森脇1995：14、三井2003：125-126）。ダッテはくだけた、話しことば的な語であるとされている（蓮沼1997：197）。

このように、現代語においてはトテが衰退し、ダッテにも文体的特徴が見られるとされる。明治・大正時代において、このようなトテの衰退や、ダッテの文体的特徴が既に見られるかを明らかにしたい。『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』にはトテとダッテの例が一定数含まれるため、両者の比較を通して、文体的相違の特徴を明らかにすることを目指す。

2.2. 使用傾向と文体の関わり

助詞や接続表現の使用傾向が文体により異なることについて、現代語・近代語研究における多くの報告がある。江戸落語・上方落語の会話と地における接続表現の使用傾向を比較した宮内（2019）では、逆接仮定条件の形式である「タッテ」「テモ」の使用傾向の比較が行われおり、「テモ」は地において多く用いられるが、用法を同じくする「タッテ」は会話に多く用いられ、対照的な結果となっている。また、会話の「タッテ」は江戸落語には一定数見られるものの、上方落語にはわずかしか見られないことから、東京語の方言的形式であると分析されている（宮内 2019：140-141）。また、現代語においても接続表現の使用傾向が文体・場面によって異なることが指摘されている（田中1999、石黒他2009、宮内2012）。

3. 調査の目的

先行研究では、活用語につく接続表現「タッテ」「テモ」についての使用傾向が明らかになっているが、ダッテとトテについては明らかでない。明治・大正時代においてもトテが「古語」らしさを持つとすれば、文語体での使用が多く見られる事が予想される。また一方、現代語のダッテが「くだけた文体」にて使用されるという特徴が報告されているが、明治・大正時代においてもその傾向が見られるかについても調査する。

（4）調査の目的
①トテとダッテの文体的相違はどのようなものか。
②話者の属性や使用場面に特徴は見られるか。

文体に関しては、文語体、口語体を含む資料によって、両者の使用に差異が見られるかという観点での調査が必要であろう。『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』には、文体の情報や、文芸作品における登場人物の属性が整理されており、上の観点から調査を行うことが可能であるため、これを使用する。

4 節にて『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』におけるトテとダッテの有無を調査し、5 節ではトテとダッテの文体的相違・出現数の推移といった全体的な特徴を見ていく。さらに、6 節・7 節ではトテとダッテ両形式が使用される戯曲資料として『女学雑誌』1894（明治27）年に含まれる「悲劇　魂迷月中刃」を取り上げ、登場人物の属性・関係性による使用差が見られることを指摘する。

4. 調査について

4.1で調査に用いた『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌』に含まれる資料の特徴を確認した後、4.2・4.3にて調査対象とする形式と検索方法を示す。

4.1. 調査資料の性質・位置づけ

『明六雑誌』『国民之友』はいずれも知識人の執筆によるもので、読者層にも知識人が想定されていたことが指摘されている。

近藤・田中（2012）によれば『明六雑誌』は学術啓蒙を目的に結成された明六社の機関誌であり、1874（明治７）～1875（明治８）年にかけて発行され、16名の識者が執筆している。内容については、西洋の近代思想を普及するために書かれた広範な論説が155編おさめられており、大半は漢文訓読風の文語体だが、中には演説的な口語体も含まれている。

『国民之友』は徳富蘇峰の設立した民友社により1887（明治20）～1898（明治31）年に刊行された。近藤（2016）は、「主に、徳富蘇峰ら民友社社員および当時の著名知識人による政治・社会・経済・文学等の評論や文芸作品を掲載する。その執筆者は幅広く、コーパス収録分だけでも80名以上に上る」と述べている。

一方の『太陽』及び女性雑誌三誌について、田中（2005）は、総合雑誌『太陽』は明治・大正時代の日本語を代表できる雑誌の筆頭であるとしている。そして、『太陽』の読者について「中学生から壮年層にわたる全国的な中産層」であったことを挙げている。さらに、田中（2006）では『太陽』の読者層から外れる人々が読んでいた書き言葉をカバーする資料として、女性向け雑誌を選んだ、としている。

このように、「明治大正編Ⅰ雑誌」には、様々な読者層をカバーする資料が含まれている事を踏まえた上で５節の分析を行う。

4.2. 調査対象

調査対象は文中に表れるトテおよび、ダッテとし、「悲しくたって」「苦しくたって」等の用言に接続するタッテも含む。ダッテとタッテは以後、文中で「ダッテ」で代表させて表記する。なお、文頭の接続詞「ダッテ」、関西方言形式「カテ」は扱わない。

4.3. 用例検索

検索にはアプリケーション「中納言」を使用しトテとダッテの検索をそれぞれ

行った。なお、検索結果に接続詞・終助詞のダッテも含まれるため目視で除外した。

5. サブコーパスにおける出現傾向

5.1. 全体の傾向

4.3 で得られたトテ及びダッテの資料ごとの使用の有無を表 1 にまとめ、使用が一例でも見られたものに丸を付している。表 1 から、『明治・大正編Ⅰ雑誌』に収録された全ての雑誌資料において、トテの使用が見られることがわかる。

一方、ダッテの使用は、知識人層による論説文が中心である『明六雑誌』『国民之友』においては、いずれの成立年でも見られず、『太陽』と女性雑誌三誌には見られるという結果となった。(1)

表 1　資料ごとのトテ／ダッテの有無

資料	出版年	トテ	ダッテ
明六雑誌	1874・75	○	×
国民之友	1887・88	○	×
女学雑誌	1894・95	○	○
太陽	1895～1925	○	○
女学世界	1909	○	○
婦人倶楽部	1925	○	○

太陽コーパスにおけるトテ・ダッテの出現数の推移をまとめた表 2 を見ると、両者が拮抗する1917年を境に、ダッテが優勢になるという傾向が明らかである。女性雑誌三誌における傾向もほぼ同様に、1909年ではトテ優勢、1925年ではダッテ優勢となっている。

表 2　太陽コーパスにおけるトテ・ダッテの出現数

年／形式	明治28 1895	明治34 1901	明治42 1909	大正6 1917	大正15 1925	計
トテ	1010	601	430	198	140	2379
ダッテ	34	134	195	182	401	946

表 3　女性雑誌三誌におけるトテ・ダッテの出現数

年／形式	女学雑誌 1894・95	女学世界 1909	婦人倶楽部 1925	計
トテ	400	207	122	729
ダッテ	35	127	201	363

同時代の趨勢として、『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅳ近代小説』に収録され

た小説の状況を見てみると、明治・大正ともに、ダッテが優勢である。これは、『明治・大正編Ⅰ雑誌』においては文語体の記事や文学作品以外の記事が多く含まれていることが理由であると考えられる。いずれにしても、トテが次第に衰退したことがわかる結果となった。

表 4　明治・大正小説における出現数

年 形式	明治小説 1887～	大正小説 1915～	計
トテ	123	39	162
タッテ・ダッテ	155	91	246

なお、「太陽」と女性雑誌三誌について、文語体・口語体での出現数をまとめた表 5 からは、どちらの文体においてもトテが使用されている一方、ダッテはほぼ口語体でのみ使用されることがわかる。

表 5　トテ・ダッテの文体別出現数

形式		トテ		タッテ・ダッテ	
文体		文語	口語	文語	口語
太陽	1895～1925	1819	560	3	976
女学雑誌	1894・95	379	21	0	35
女学世界	1909	52	155	0	127
婦人倶楽部	1925	4	118	0	201

（4）調査の目的①「トテとダッテの文体的相違はどのようなものか」についてわかったことは、二点ある。まず、著者が知識人層であり、内容が論説文中心であるという特徴をもつ『明六雑誌』『国民之友』については、トテの使用は見られたが、ダッテの使用は見られなかった。次に、用例の文体について、ダッテはほぼ全てが口語体であった。

一方、トテは、文語体・口語体いずれの文体でも使用されている。すなわち、文語体でのダッテの使用は見られないが、口語体でのトテの使用は資料によっては見られるという、文体的相違が見られることを確認した。

6. 戯曲資料「月中刃」におけるトテ／ダッテ

本節では、口語体かつ文学作品の例に焦点をあてて、トテ／ダッテの使用をさらに見ていき、（4）調査の目的②「話者の属性や使用場面の特徴は見られるか」について考えていく。以降、『女学雑誌』コーパスに収録された、岩野泡鳴「悲劇　魂迷

月中刃　一名、桂吾良」（1894（明治27）年出版・以下、「月中刃」と記す）を取り上げる。

「月中刃」に注目する理由として、一つには、調査対象であるコーパスに収録された資料の中で両形式が最も早く使用されている作品であること、及び、話者の性別・職業・関係性等の情報を得やすいことが挙げられる。コーパスに含まれていない情報については『泡鳴全集』第13巻（1921年、広文庫）を参照した。『女学雑誌』の用例（表３）のうち、「月中刃」におけるトテ11例と、ダッテ・タッテ23例[(2)]について、それぞれの意味および、各形式を使用する登場人物について分析結果を述べる。

6.1.「月中刃」におけるトテ／ダッテの意味

トテの意味の分析基準について、辻本（2017b）による「トテの用法分類」を参考に、用例を整理したところ、「引用」の下位分類とされる「資格」「極限」が見られた。前接語の内訳と共に表６にまとめた。例を挙げて見ていく。

表６　「月中刃」におけるトテ／ダッテの分布

形式	意味		前接語の内訳	
トテ	資格	1	体言相当	1
	極限	10	助動詞「タ」終止形	6
			体言相当	3
			ばとて	1
ダッテ	極限	23	助動詞「タ」終止形	3
			体言相当	18
			副詞	1
			形容詞	1

6.1.1 トテ①資格を表す：［前接要素］名詞

辻本（2017c）の「資格」とは、名詞に接続し、後続節の事柄を引き起こすものがどのような立場・資格でその事柄に関わるかを示すものとされる。「月中刃」中に一例見られたが、「浄瑠璃」による七五調の語りの場面であり、特殊な場面で使用されている。

（５）浄瑠璃。「こひしきそらは千萬里、また逢ふまでのかたみとて、ゆび輪一とつをおもひ出の、ゆめにそひ寐のおすがたも、さめてはいつか歸へりこん？（60M女雑1894_42006　13140　8020）

6.1.2 トテ②極限を表す：［前接要素］活用語終止形または名詞

「資格」の一例以外は「極限」の例であった。

極限の意味合いとは、2.1. で取り上げた、日本語記述文法研究会（2009：87）による「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を暗示する」機能である。（６）は助動詞タの終止形の「タトテ」、（７）は名詞の例である。湯澤（1982：480）、辻本（2017 c）でも指摘されるように、これらは「言っても」「この後といっても」のように、仮定逆接の意味で解釈することも可能な例である。

（６）いもとゝしたことが、まァ、うらめしいわいのぅ。さう慝くさずにいッたとて、あねでャ無いか、何んの耻ぢ？（60M 女雑 1894_34015　13200　8490）
（７）わたしは、もう、つらきまじはり絶ッて居りますから、こののちとて、おちから頼むはあなたひとり。（60M 女雑 1894_37015　31470　19080）

6.2. ダッテ・タッテ　極限を表す：［前接要素］活用語終止形または名詞・副詞・形容詞

極限を表すダッテ・タッテには、活用語終止形を受けるもの（８）、名詞を受けるもの（９）、そして、副詞を受けるもの（10）も見られた。

（８）大體なことでャないに、十錢や十五錢儲けたッて、飲んでしまへば、かすほども殘こらぬ。（60M 女雑 1894_40022　220　170）
（９）定行。それャァきまり切ッたことさ、おれだッて、ゆるさんでも無いが、見ろ、まァ、桂を。あの考がへが氣にくはん。（60M 女雑 1894_40022　20310　12890）
（10）民子。それでも、すこしだもの。瀧子。すこしだッて、耻づかしいことは無いよ。持ッておいで。桂。ありッたけでいゝからね。（60M 女雑 1894_40022　43590　27850）

上接語が体言相当である例をさらに見ていくと、疑問語を受けて、「誰でも」と同様の意味で使用される「だれだッて」も見られる。副詞・形容詞・疑問語を受ける例はトテには見られなかったものである。

（11）宮城。しかし、まァ、かわいさうでャァ無いか？醫者ならばこそ見せるが、誰

れだッて、自分のつま先の傷さへ人に隠くすものだのに、まさか、人にかッたいぐすりを飲まされたのでャァ無し（60M女雑1894_41014　43790　27950）

辻本（2017c）では、中古のトテには極限・資格以外に、「名目を表す」「事情を表す」「名称を表す」「日時を表す」等（辻本2017c：pp.4-7）、様々な用法があったことが指摘されているが、口語体・文学作品の「月中刃」では、極限以外の用法は少ない。この傾向は髙谷（2020）で調査した、現代日本語書き言葉均衡コーパスに所収の文学作品におけるトテの使用傾向とも同様である。トテが極限以外の用法で使用されなくなることも、衰退の状況を反映していると考えられる。

また、トテの前接語が用言を受けるものは助動詞タをとる「タトテ」のみであり、その他の助動詞や、動詞・形容詞の例も見られない。特定の形式のみが使用される点からも、トテの衰退がうかがえる。

7. 使用場面の特徴

トテ・ダッテが使用される場面についての特徴を見るため、「月中刃」の人物描写をもとに用例を確認したい。以下に挙げる用例には話者の情報を付与する。(12)(13)のトテの例はそれぞれ、和尚から檀家の青年に対する会話、軍医の男性から親しい間柄の女性に対する会話である。

(12)和尚。しかし、あなたいつまでお考がへなされたとて、まアぐづ付くのが高尚では御坐りますまい？あなたのをぢさんをばさんばかりか……（60M女雑1894_36018　46540　29270　大浄寺の和尚→桂吾良）
(13)ほかのものはもち論をがむのでは無いでせう、わたしとてもおなじこと、いし木など拜するので御坐いません。然し、湧いて來ますうたがひ雲のたとへも……（60M女雑1894_37015 9930 6320　桂吾良→上田浪子）

表7は、トテ／ダッテの使用が見られた人物・役割を、性別・年齢・属性とともにまとめたものである。トテのみを使用する登場人物は、幽霊・故人・和尚、また、若年層の男女（桂・渋谷）中年層の男性（森定行）等多様である。また、台詞以外の登場人物の心情を語る「浄瑠璃」においてもトテが使用されている。年齢層や性別に、偏りは見られない。

ダッテを使用する登場人物はトテよりも多く、九名であり、男女とも使用している。若年女性・中年女性の例が見られるが、男性の場合、年齢が高い人物における

使用は見られなかった。

表 7　「月中刃」においてトテ／ダッテを使用する登場人物

登場人物	年齢・性別	属性	トテ	ダッテ
お鶴	中年女性	豪商・渋屋繁太郎の妻	×	○
森民子	若年女性	子爵・森定行の娘	×	○
森滝子	中年女性	子爵・森定行の妻	×	○
上田浪子	若年女性	看護婦	○	○
渋屋雪子	若年女性	看護婦	○	×
上田浪子の姉の霊	不明（若年で死去）	幽霊	○	×
上田浪子の母	中年女性	故人・浪子の回想	○	×
宮城純	若年男性	軍医・桂の親の仇	×	○
山口進	若年男性	軍医・森家に押し入る賊	×	○
甚六	男性	森子爵家掃除	×	○
賊三	男性	森家に押し入る賊	×	○
森定行	中年男性	子爵・桂の叔父	○	○
桂吾良	若年男性	軍医・森定行の甥	○	×
和尚	高年男性	大浄寺の和尚	○	×
浄瑠璃	なし	語り	○	×

7.1. 使用場面の相違点

使用場面における相違点を、二点挙げる。まず、トテに見られ、ダッテに見られない特徴について述べる。トテは語りにおいて使用例が見られるが、ダッテはそれが見られないという差がある。(14) は浄瑠璃の例で、劇中で登場人物の心情や状況を、情感を込めて伝える役割を担っている。このような浄瑠璃において、ダッテの例は見られない。

また、話し手と聞き手の関係をまとめた表 8 と表 9 を見ると、トテの 11 例のうち、姉から妹へ、また、主人から家令へむけた発話（15）などの上位者から下位者への発話で使用されている例が見られる。以上二点がトテの使用場面における特徴である。

(14) 浄瑠璃。「こひしきそらは千萬里、また逢ふまでのかたみとて、ゆび輪一とつをおもひ出の、ゆめにそひ寐のおすがたも、さめてはいつか歸へりこん？（60M 女雑 1894_42006　13110　8010）

(15) 定行。それでャァ、宮城のあとを追ッたに相違無い。どうせつみに落ちればとて、澤田、早やく大浄寺へ行ッて、和尚に頼のんで引もどさせよ。（60M 女雑 1894_42006　145330　92090　定行→澤田）

表 8 「月中刃」におけるトテの話し手と聞き手の関係性

関係	話し手	話し手の属性	聞き手	聞き手の属性
姉→妹	上田浪子の姉の霊	幽霊	上田浪子	看護婦
母→娘	上田浪子の母	故人・中年女性	上田浪子	看護婦
同僚	桂吾良	軍医	赤木	軍医
僧侶→檀家	和尚	大浄寺の和尚	桂吾良	軍医
異性の友人	桂吾良	軍医	上田浪子	看護婦
異性の友人	上田浪子	看護婦	桂吾良	軍医
父→娘	森定行	子爵・桂の叔父	森民子	森定行の娘
なし	渋屋雪子	看護婦	独言	なし
なし	浄瑠璃	語り	なし	なし
主人→家令	森定行	子爵・桂の叔父	澤田	森家家令

次に、ダッテに見られ、トテに見られない特徴を挙げる。話し手と聞き手の関係において、女性の友人同士、仲間同士、及び、娘から母親という関係でダッテが使用されるが、トテの使用は見られない。(16) は、親しい女性の友人同士の関係である。また、(17) と (18) は、仲間に対する発話である。女性同士の対等な友人関係において「わたしだって」と、ダッテが使用されている。また、盗賊同士の会話でも「おいらだッて」「どろ棒だッて」というように、ダッテが使用されている。このような同性間の対等な関係において、「月中刃」ではトテの例は見られなかった。

(16) 浪子。それャァ、わたしだッて寐ますわ、だが、氣がゝり。雪子。どんなゆめ？（60M 女雑 1894_34015 26010 16190 上田浪子→渋屋雪子・同性の友人）
(17) さすがァ、いち度軍醫をやッて見たゞけあらァ。一。おいらだッて、手めェたちのおや分で、毎晩 / ＼こんなことをしてェれャァ、こんな氣樂な商ベェはねェが……（60M 女雑 1894_42006 157530 100120 山口進勘太→賊仲間）
(18) 手めェが道理を知らねェんだ。どろ棒だッて、このくれェのことァ知らねェやつァねェぞ。（60M 女雑 1894_42006 152230 96630 賊→賊仲間）

さらに、ダッテを使用し、トテを使用しない男性の人物描写に注目すると、宮城純（軍医・桂（主人公）の親の仇）、賊（森家に押し入る賊）山口進（軍医・後に森家に押し入る賊）の四者は、所謂「敵役」であるという特徴が見られる。

表 9　「月中刃」における助詞ダッテの話し手と聞き手の関係性

関係	話し手	話し手の属性	聞き手	聞き手の属性
同性の友人	上田浪子	看護婦	渋屋雪子	看護婦
異性の友人	上田浪子	看護婦	桂吾良	軍医
なし	宮城純	軍医・桂の親の仇	独言	なし
夫→妻	森定行	子爵・桂の叔父	森滝子	森定行の妻
母→娘	森滝子	森定行の妻・民子の母	森民子	森定行・滝子の娘
母→娘の許嫁	森滝子	森定行の妻・民子の母	桂吾良	軍医・民子の許嫁
娘→母	森民子	森定行・滝子の娘	森滝子	森定行の妻・民子の母
患者の母→主治医	お鶴	豪商・渋屋繁太郎の妻	宮城	軍医・桂の親の仇
主治医→患者の母	宮城純	軍医	お鶴	豪商・渋屋繁太郎の妻
子爵家の清掃人	甚六	森子爵家掃除	平助	森子爵家掃除
賊仲間	山口進	軍医・森家に押し入る賊	勘太	森家に押し入る賊
賊仲間	賊三	森家に押し入る賊	賊二	森家に押し入る賊

8. まとめ

本稿では、①トテとダッテの文体的相違はどのようなものか、②話者の属性や使用場面の特徴は見られるかという疑問のもと、「日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌」を調査した。

①について、全体の様相に関しては、次のことがわかった。著者および読者層が知識人層であり、内容が論説文中心であるという特徴をもつ『明六雑誌』『国民之友』については、トテの使用は見られたが、ダッテの使用は見られなかった。一方、中間層を読者層に持つ『太陽』及び女性雑誌では、トテ／ダッテがいずれも用いられている。また、『太陽』と女性雑誌のすべてにおいて、大正15年（1925年）を境に、トテとダッテの勢力が逆転しており、トテ衰退の状況が見て取れる。

続いて、文体上の特徴について、次のことがわかった。トテは、文語体・口語体いずれの文体でも使用されている一方、ダッテはほぼ全てが口語体であった。したがって、文語体でのダッテの使用は見られないが、口語体でのトテの使用は資料によっては見られるということを確認した。明治・大正時代の雑誌においても、ダッテは口語体で使用される表現であることが確認できた。

②については、同一作品内でトテを使用する人物とダッテを使用する人物には異なった傾向が見られることを述べた。『女学雑誌』（1894年）に収録された『悲劇魂迷月中刃一名、桂吾良』を例にとり、話し手・聞き手の属性や両者の関係性を調査した。トテの使用が見られた登場人物には、際だった傾向・偏りは見られなかったものの、台詞以外の登場人物の心情等を語る「浄瑠璃」や、目上の人物から目下の人物への会話においては、トテのみが使用されるという特徴が見られた。一方、トテを使用せず、ダッテのみを使用する人物としては、若年男性が多く、脇役・敵役

もこれに含まれることがわかった。

9. 今後の課題：発話キャラクタ（定延：2011）との関わり

以上の調査結果のうち、②話者の属性や使用場面の特徴については、より多くの作品の分析から傾向を導き出す必要が有ると考えており、これについては今後の課題である。

分析の手法として、作品の人物描写をもとに、定延（2011）の発話キャラクタ分析を援用し、トテ／ダッテを使用する人物の傾向を、「品」「格」「性」「年」という四つの尺度で判断することを考えている。定延（2011）は、日本語における「キャラクタ[(3)]」と言葉の関わりを分析しており、キャラクタが言葉を発する際、そのキャラクタを発話キャラクタと呼び、発話キャラクタが発する言葉を、金水（2003）の用語を使用して「役割語[(4)]」と呼んでいる。四つの尺度を使用することで、発話キャラクタが発する役割語が記述できるとされている。以下が、「格」「品」についての定義である。

(19)「格」とは、経験や力や地位などから総合的に醸し出されるものである。格上の上にはまた格上がいる。その格上の格上の格上、そこからさらにかけ離れた格上に鎮座ましましていらっしゃるのが《神》である。
(20)「品」とは何よりも巷の人間に想定される概念である。当該社会が課す文化的制約から逸脱せず、その中におとなしく、慎み深く、控えめにおさまるが、その行動はあくまで自由で美しく見え、制約を感じさせない、というのが上品で、そうでないのが下品である。（定延2011：140　下線は筆者による）

トテが「古語性」を持ち、古めかしい印象を与えることと、発話キャラクタが「年輩」「格上」といった特徴を持つこととの関わりが予想される。トテを使用する登場人物に「和尚」「幽霊」が含まれることから、同様の傾向が他の作品にも見られるか、今後確かめたい。また、ダッテについても、特に男性の登場人物には、主人公に対する敵役であり、また賊であるという特徴があり、「格」「品」の点で「下」であるという傾向が見られる。この点についてもより広く文学作品を観察し、傾向を見いだしたい。

注

（1）トテの検索：キー：語彙素 =” とて” IN subcorpusName=” 明治・大正－雑誌” AND

（core=” true” OR core=” false”）／ダッテ・タッテの検索：①と②を合算する。①キー：（語彙素 =” って” AND 品詞 LIKE “助詞 - 副助詞 %”）AND 前方共起：（品詞 LIKE “助動詞 %” AND 語彙素 =” た”）ON 1 WORDS FROM キーIN subcorpusName=” 明治・大正 - 雑誌” AND 作品名 =” 女学雑誌” ②キー：（語彙素 =” って” AND 品詞 LIKE “助詞 - 副助詞 %”）AND 前方共起：（品詞 LIKE “助動詞 %” AND 語彙素 =” だ”）ON 1 WORDS FROM キーIN subcorpusName=” 明治・大正 - 雑誌” AND 作品名 =” 女学雑誌”

（2）注（1）のダッテの検索方法による①と②を合算したのち、巻名等「悲劇　魂迷月中刄　一名、桂吾良」の例を目視で抜き出す。ダッテ20例、タッテ 3 例、合計23例。

（3）定延（2011）の「キャラ（クタ）」の定義：「本当は意図的に変えることができるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見た方もそれが何事であるかすぐにわかり、気まずい思いをするもの」

（4）『老人』キャラが「わしじゃ」としゃべるとき、このキャラクタを発話キャラクタと呼ぶ。

参考文献

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12, pp.73-85, 一橋大学

小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店

此島正年（1973）『国語助詞の研究：助詞史素描』増訂版　桜楓社

近藤明日子・田中牧郎（2012）「『明六雑誌コーパス』の仕様近代語コーパス設計のための文献言語研究成果報告書」『国立国語研究所共同研究報告』12-03, 国立国語研究所

近藤明日子（2016）「『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』の構築：形態論情報を付与した近代雑誌コーパスの設計」『日本語の研究』12（4）, pp.167-174, 日本語学会

定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり - 顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂.

髙谷由貴（2020）「現代日本語文学作品に見られる引用辞トテの用法」『東亜大学紀要』30, pp.15-25.

田中章夫（1999）『日本語の位相と位相差』明治図書

田中牧郎（2005）「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究―「太陽コーパス」研究論文集―』博文館新社

田中牧郎（2006）「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（B）「20世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述』pp.55-62

辻本桜介（2017）「中古語のトテについて（一）」『米子工業高等専門学校研究報告』52, pp.9-25

辻本桜介（2017）「中古語のトテについて（二）」『米子工業高等専門学校研究報告』52, pp.26-43.

辻本桜介（2017）「中古語のトテについて（三）」『米子工業高等専門学校研究報告』52, pp.44-58.
友定賢治（2003）「とりたての体系の地理的変異」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版，pp.257-273.
日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 5』くろしお出版
蓮沼昭子（1997）「「だって」と「でも」－取り立てと接続の相関－」『姫路獨協大学外国語学部紀要』10，pp.197-217.
蓮沼昭子（2003）「取り立て詞「だって」について－「も」「でも」との比較を通して」『姫路獨協大学外国語学部紀要』16，pp.251-268.
三井はるみ（2003）「極限のとりたての地理的変異」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版，pp.123-142.
宮内佐夜香（2012）「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として」『国立国語研究所論集』 3，pp.39-52.
宮内佐夜香（2013）「近世後期江戸語における逆接表現旧形式「ド」「ドモ」について」『近代語研究第十七集』武蔵野書院，pp.183-199.
宮内佐夜香（2019）「落語の「会話」と「地」の東西比較接続辞使用傾向から見るスタイル」金澤裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院，pp.129-148.
森脇茂秀（1995）「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって（一）」『別府大学紀要』36，pp.14-25.
湯澤幸吉郎（1982）『徳川時代言語の研究』風間書房

コーパス・資料

国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi（2021年10月31日確認）
国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅳ近代小説』https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shosetsu（2021年10月31日確認）

付記

本研究はJSPS科研費20K13057ならびに国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一部です。

（たかや・ゆき　神戸市外国語大学国際交流センター留学生担当嘱託講師）